

(上面)



(表面)



上高津貝塚出土の鹿角製ペンダント

上高津貝塚は霞ヶ浦沿岸地域でも有数の規模を誇る縄文時代の貝塚です。数多くの調査などによって、この地に暮らした縄文人が残した多様な出土品が見つかっています。その中には縄文人が身に付けた装飾品も出土しています。今回ご紹介する鹿角製ペンダントもそのひとつといえます。この出土品を調べていくと、遠隔地に暮らす人びとの交流の様子が読み取れます。

この鹿角製のペンダントは、上高津貝塚のA地点貝層から昭和38(1963)年に採集されたものです。大きさは縦1・8cm、横2・1cm、厚み0・8cmという小さなもので、非常に精巧な作りとなっています。鹿角を縦に裁断した薄い板状の素材を用いて、中央部分を削り出したリング状の形となっています。特に興味深い点は、鹿角の中でも組織が粗い中心部分を避け、表面に近い緻密で堅い部分が素材として用いられています。その独特な装飾の表現などから、今から3000年前の縄文時代晩期に作られたものと考えられます。このペンダントの上下の端部には、径0・2cm程度の貫通する穴が開けられており、そこに細い紐を通して首から下げたものと思われます。表面には赤い顔料が全体に塗られていたようで、特別な意味を込めて限定された人が身につけていたものと考えられます。

この上高津貝塚出土の鹿角製ペンダントと同じ

小さな鹿角製ペンダント

形態のものは、現在のところ関東地方の霞ヶ浦沿岸地域から東京湾沿岸地域ではほとんど知られておらず、意外にも宮城県仙台湾周辺の貝塚で目立って出土しています。具体的に例をあげれば石巻市の沼津貝塚、東松島市の里浜貝塚、七ヶ浜町の大木囲貝塚などの出土品に見ることが出来ます。いずれの貝塚で出土しているものも、上高津貝塚出土例と全く同じ構造の作りで、ほぼ同じ大きさのものが見られることも重要なことと思われます。仙台湾周辺の貝塚出土品と上高津貝塚出土品を比べると、丁寧に刻まれた装飾の造作も全く同じです。このことは、仙台湾周辺の貝塚と上高津貝塚との間で、鹿角製ペンダントをめぐる何らかの関わりが存在したことを物語っています。

今回ご紹介しました鹿角製ペンダントが作られた縄文時代晩期には、東北地方が発信源となる様々な文物が関東地方まで伝わり、さらに西方の地域まで及んだことが指摘されています。この大きな潮流の中、上高津貝塚でもこのペンダントが使用されたのだと思われます。

今回ご紹介しました鹿角製ペンダントについては、5月末まで上高津貝塚ふるさと歴史広場にて展示してあります。ぜひご覧ください。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場 ☎ 826・7111